混成第九旅団の日清戦争（4）

――新出史料の「従軍日誌」に基づいて――

原田敬一

〔抄　録〕

本稿は、新出の史料である「従軍日誌」一編を使用して、「日清戦争」を従軍者がどのように描いているか、を追究した『歴史学部論集』創刊号以来掲載してきた論考の続きである。何度も繰り返すが、「従軍日誌」の著者は、混成第九旅団野戦砲兵第五聯隊第三大隊第五中隊に属する将校であり、一八九四年六月六日から翌年二月一四日まで日記を書き続けた。戦争が終わって後の清書や、整然と整理された刊行物ではなく、戦場という現場で書いていた日記と推測される。しかもこの執筆者は、日本の大本営が、日清戦争開戦前に、「居留民保護」を名目に朝鮮に派兵した混成第九旅団のうち、最初に派遣された部隊の一員であったという特色がある。参謀本部が編纂し、刊行した『日清戦史』全八巻には、中塚明氏や一ノ瀬俊也氏などにより遺漏や改ざんの跡がいくつか指摘されており、そのことも、「従軍日誌」という軍人自身の記述により再検討することができる。『歴史学部論集』創刊号に六月六日から七月二六日まで、同第2号に七月二七日から九月一四日（平壌総攻撃前日）まで、第3号に九月一五日（平壌総攻撃日）から一〇月二三日まで掲載した。本号は、鴨緑江渡河戦にむかう一〇月二四日から、鴨緑江渡河戦、九連城攻略戦を経て、冬期の鳳凰城守備戦になる。

以後は次号となる。

キーワード　日清戦争、従軍日記、混成第九旅団、砲兵、将校

はじめに

混成第九旅団の戦争は、平壌戦を終え、鴨緑江を渡り、中国へと移っていく。筆者の部隊も、鴨緑江渡河作戦に参加する。これまでも述べてきたことだが、部隊の正式な「戦闘詳報」に基づき、戦後になって参謀本部編纂の『日清戦史』が作成されたが、本稿の検討を続ける

中で、筆者の「従軍日誌」には『日清戦史』と異なる記述があることがわかった。それを明らかにするため、本稿の叙述は複雑になったがお許し願いたい。二つの史料の違いについては、行論の中逐一指摘して、その理由などを最後に考えてみたい。

一　「鴨緑江畔ノ戦闘」

（1）行軍の困難

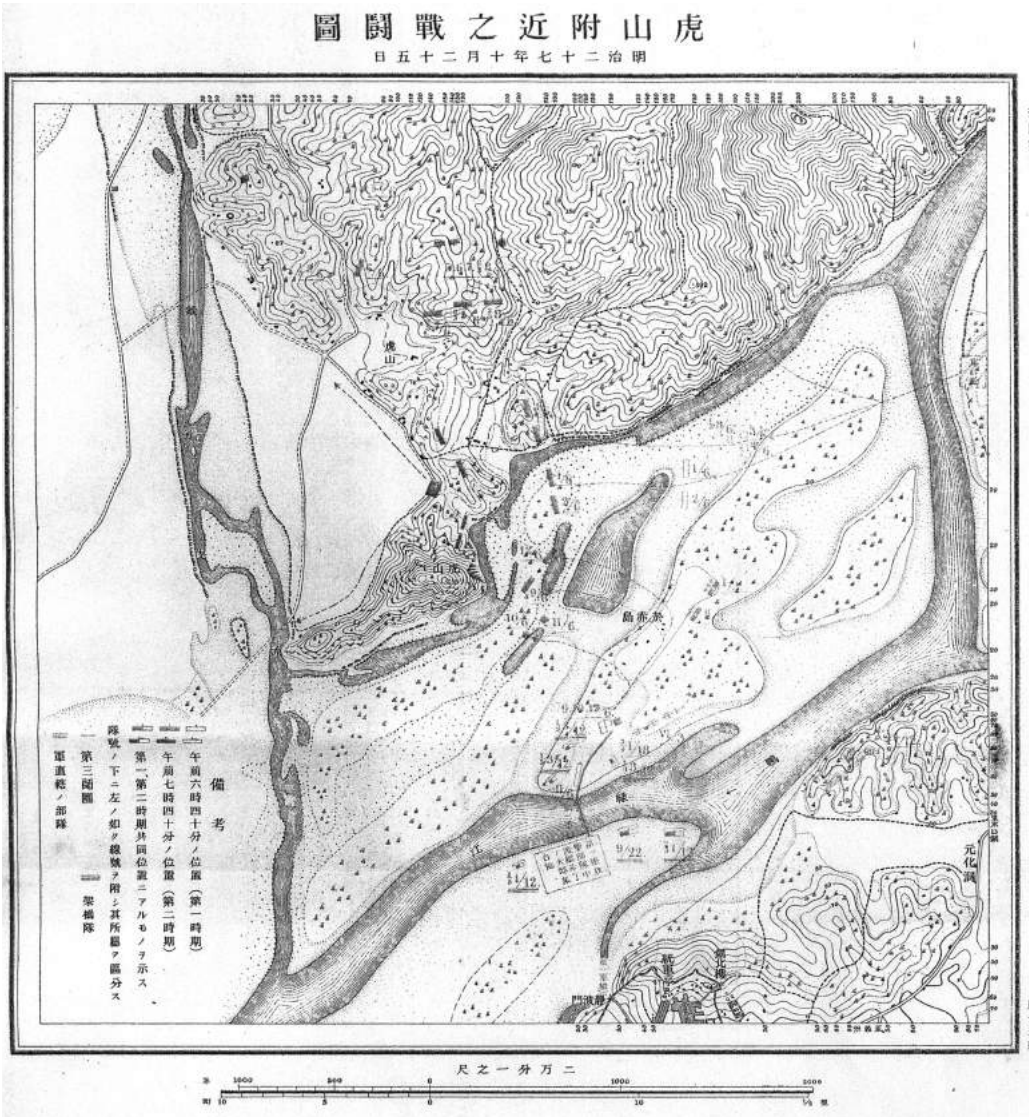
一〇月二二日の山縣第一軍司令官の命令、鴨緑江渡河をめざし、二四日までに義州（鴨緑江左岸）に集合せよ、に従って、第三・第五師団・混成第六旅団は、続々と義州めざして行軍を続けた。第五師団は、混成第一〇旅団（旅団長：立見尚文少将）を二二日軍司令官命令の前に先遣させ、第一梯隊は一〇日、第二梯隊は一七日に鴨緑江左岸の義州に到着した（『日清戦史』第二巻二二八頁）。『日清戦史』は「義州ニ到著シ」とあるのみなので、清国軍は退却した後で、戦闘はなかったようだ。立見旅団は、ただちに「渡河ノ準備」（同）を開始した。筆者の野戦砲兵第五聯隊第三大隊は、混成第九旅団（旅団長：大島義昌少将）に編成され、一〇月二四日（水曜）には第二行進団隊として進んでいった。明け方の五時から夕闇となった午後六時まで一三時間の行軍であり、山路でもあったため、困難な行軍となった。

十月廿四日　晴天
午前五時義州ニ向テ前進、午後六時着、此日ハ里程遠ク且ツ山路ノミニシテ行進頗ル困難、義州ノ西北方ニテ舎営ヲナス／此時敵ハ既ニ我ニ向テ時々発砲セリ

第一軍司令部の計画では、鴨緑江を安東県（右岸の都市）付近でわたり、その北方九キロにある軍事拠点・九連城の退路を断つというものだったが、安東県付近では鴨緑江が幅広で沼沢も多く、渡河しにくいことが判明し、九連城と鴨緑江を挟んで東西関係にある義州付近で渡河する作戦に変更する。歩兵二箇大隊と野砲一小隊からなる小部隊（佐藤支隊）を義州北方一三キロの水口鎮（徒渉が可能）から渡河させる陽動作戦も合わせて企図された。二四日筆者の野砲大隊を含む第五師団のほとんどが二四日夜までに義州に着いた際（二九三頁）、清国軍の発砲が時々あった、という日記の記述は、義州が九連城から七キロしか離れていないため、動静が清国軍にわかっていたためと思われる。予備砲廠（臼砲一二門、野砲六門）も同日到着した（同）。清国軍は、九連城、安東県のほか、鴨緑江中洲にある虎山に前進哨を設けて対戦準備を進めた（同）。

（2）渡河の困難

第1図にあるように、義州から九連城へ進むには、まず鴨緑江を渡河し、中洲を進んで、ついで靉河を渡らねばならない。靉河は徒渉できるが、鴨緑江は水口鎮より下流では徒歩で渡れる地点はなく、水深も二メートル以上あった。中洲は砂州で、高粱畑として使われていたが、一〇月下旬のこの時期には収穫されていて、「展望ヲ妨ケサリキ」（二九四頁）と困難が予想される渡河作戦だった。「日記」に見られる「虎山」は虎山のことである。九連城は、北方一・五キロの高地から



第１図　虎山付近図（『日清戦史』第二巻挿図第三）

続く山並みを利用し、四個の砲台が建設され、そこから九連城まで三キロには連系堡が続き、所々に砲台もあった。九連城後方の高地にも数個の砲台が睨みを利かせていた。南方の安東県でも、二キロに渡る堡塁と砲台が建設されていた。ただ、情報では、これらの工事は数週間前に始められ、多くは「未タ完結ニ至ラス」（二九五頁）という未完成の状態だった。清国軍の前衛哨が設けられた虎山は、九連城から東北四キロの高地にあり、孤立していた。こう偵察した第一軍司令部は、虎山をまず攻略、そこを拠点にして九連城を攻撃、と作戦計画を立てる。鴨緑江を渡河するには架橋（舟をつないで仮橋にする）しなければならず、その護衛砲兵隊として筆者の部隊は位置づけられた。

渡河作戦の難問は、この架橋作業だった。作業は二四日夜中に完成させよ、という軍司令官命令が下り（三〇三頁）、二個の軍橋を架ける作業にかか

ったが、最初に架橋材料でつまずいた。現場には、二五橋節分の鉄舟（第三師団大小架橋縦列の分）とベルギー式架柱（工兵第五大隊の分）が集められた。工兵第五大隊が集めた近隣の荷物船と朝鮮丸木舟計二、三艘や急造舟は、掩護隊の事前渡河に使用することになった（三〇三頁）。第一軍司令官が発した二四日午後六時の命令は、「架橋隊ハ明二十五日午前四時迄ニ義州府西北方ニ於テ鴨緑江ニ架橋ヲ完成スヘシ」（三〇七～八頁）とあった。実際の架橋作業は、第三師団の工兵第三大隊が担当し、鴨緑江に架ける第一軍橋は、架柱四本の全長二〇メートルで、午後六時から始めた作業も七時に終わり、一時間で完成した。工兵第三大隊第二中隊と工兵第五大隊第二中隊の協力で始まった第二軍橋は午後八時半に作業が始まったものの、難航した。幅が広いので鉄舟を連結させて仮橋を造らねばならないのに、持参した鉄舟がゆがんでいて二五橋分のうち一〇橋分が使い物にならず、急造の木造船五隻を代用させることになった。その上に、「寒気既ニ甚シク手足凍痿シ（中略）作業意ノ如クナラス」（三一三頁）という状態だった。この引用史料中の（中略）は二行割りの注記で、作業に当たった工兵は、腰や胸まで水に入って操作した、と記している。結局、全長一九三メートルの架橋作業が終わったのは二五日午前六時だった（同）。この間「暁霧深ク鎖シテ我行動ヲ掩蔽セリ」（三一五頁）と天候の掩護もあった。架橋が終わるまで続々と第五師団や立見旅団の部隊が渡河地点に進出しており（同）、完成とほぼ同時に渡河した歩兵第六聯隊第三大隊が渡り終わったのは六時四〇分。次いで野砲第三聯隊第一大隊が渡河し始めた。筆者が、「午前二時十五分ヨリ開戦」し、午前四時には前衛硝を占領した、と記録するのは、これらの戦史記述と整合しない。

（3）虎山の攻略

第三師団に属する歩兵第六聯隊の二箇大隊（第一・第二）は、二四日午後一一時半から虎山北方の鴨緑江を五、六〇人乗り船三隻で渡河し、虎山東方二キロの地点に進出していた。まず第一大隊が進出して展開し、第二大隊の渡河が終わったのは二五日午後五時半頃だった（三一六頁）。第一大隊の進出・展開が、筆者の言う「午前二時十五分ヨリ開戦、四時頃（中略）占領」にあたるのかもしれない。そうだとすると、この戦闘記述部分は、戦闘終了後に書かれたことになる。歩兵第六聯隊の二箇大隊は、進出後午前六時四〇分には、虎山北方六、七〇〇メートルの地点で射撃線をしいた（三一七頁）。六時二〇分には、予備砲廠の野砲六門が虎山鞍部の砲台をめがけて砲撃を開始する。虎山の清国軍と進出した第一軍との間で射撃戦が始まったのは、午前六時五〇分頃（同）。七時七分には、清国軍の速射砲二門も、虎山の鞍部に進出し、歩兵第一大隊を砲撃し始める。一〇分後の一七分には、野砲第三聯隊第一中隊も第二軍橋を渡り、中の島に進出してきたので、速射砲に反撃し始めた。次第に第一軍は虎山に近づき、午前八時には虎山鞍部に突貫攻撃の上、占領する（三二一頁）。午前八時四〇分には、虎山の守備軍と、九連城から靉河右岸に進出してきた清国軍の二部隊（野砲四門を持つ約三千の銘字軍と、約五、六千の総兵馬玉崑・宋得勝の軍）に対し、左岸には第三師団、第三師団の南方には立見旅

団が対峙するという状況となった。午前八時五三分には、歩兵第一二聯隊の第一〇中隊が虎山を占領し、進出してきた第一一中隊と守備線を形成する。

両軍は、靉河を急いで渡河し、敵軍を包囲する作戦をとり、砲撃・射撃が激しさを増していった。特に歩兵第六聯隊の正面にいる清国軍は「頑強ニ抵抗シ毫モ退却スルノ色ナカリキ」（三三一頁）で、午前九時半、第六聯隊は「突貫」で突破しようとしたが（同）、「激烈ナル射撃」で突破できなかった。その後も「突貫」は続けられ、計四回の実施で午前九時四五分頃「遂ニ前面ノ敵ヲ駆逐セリ」（三三二頁）。傾斜地を走ったため「隊伍錯乱シ多数ノ死傷ヲ生セリ」（同）。突貫した第六聯隊第一大隊は将校一名、下士卒一三名が戦死、将校三名、下士卒二六名が負傷。同第三大隊は、下士卒八名が戦死、同二七名が負傷となった（『日清戦史』第三巻、「附録第三十　明治二十七年十月二十五日　虎山附近戦闘第一軍死傷表」）。戦死将校は第三中隊長、負傷将校は第一大隊副官、二人の小隊長で、副官以外の三名は確かに「突貫」の結果だろう。中隊長・小隊長・分隊長（下士官）が「突貫」を含む白兵戦では先頭に立つため死傷が増加する。このことは日露戦争で、下級指揮官の不足という事態となって、日本軍の戦闘能力を著しく落とすことになる。

筆者が「午後二時頃迄ハ銃声熾ンナリシガ三時頃ヨリ止ム」と記しているように、午後三時過ぎには靉河両岸を第一軍が占領し終えた（三三七頁）。午前一一時第一軍司令部は虎山北方鞍部に、午後三時には第九旅団司令部が虎山東麓に前進した（三四〇～三四一頁）。午後三時半、第三師団は虎山西北四キロの楡樹溝付近、第五師団はその南方と虎山付近、第一軍司令部は虎山と、この夜の露営地が指示された（三四一頁）。筆者の居る野砲第五聯隊第三大隊は、架橋護衛隊の役割を終えた後、「義州ニ在リ、夜半虎山ニ到ル」（三四二頁）となった。この日の激戦には参加していない。そのためこの日の記事は傍観者的な記述となっている。

清国軍が午後六時から暗夜にもかかわらず砲撃を続けたのは、訳があった。第一軍は渡河の際、水濡れした者が多く、それを乾かすために軍司令部は火をたくことを特別に許可した。乾かさなければ凍死も考えられた。それを目標に二キロ程離れた九連城北方高地の砲兵が撃っていた。「暗夜ノ砲撃其効ナシ」ではなく、「午後八時頃砲弾一発歩兵第十一聯隊第八中隊ノ露営地ニ落下シ将校二名兵卒二名負傷セリ」（三四四頁）だった。

十月廿五日　晴天

命令左ノ如シ

敵ハ鴨緑江ノ上流ヨリ乖山前衛哨ヲ設ケ九連城ヨリ遠ク安東県ニ至ル間大ナル工事ヲ成シツヽアリ／軍ハ午前二時ヨリ乖山方向ノ敵ニ向テ攻撃ヲナス、軍隊区分左ノ如シ

前衛　司令官　立見少将

歩兵第二十二聯隊　騎兵第一大隊　騎兵第五大隊

中原枝隊　司令官　中原歩兵少佐

歩兵第十一聯隊第二大隊　騎兵一小隊

本隊　司令官　野津中将

自余ノ部隊ハ皆之レニ属ス
我砲兵大隊ハ軍橋（軍、抹消）護衛隊ニ属ス
午前二時十五分ヨリ開戦、四時頃我第三師団ハ山砲二門ト敵塁一ヶ所ヲ占領セリ
前衛ハ前進シ乗山ニ向フ
午後二時頃迄ハ銃声熾ンナリシガ三時頃ヨリ止ム／午後六時ヨリ亦頻リニ砲声セリト雖モ暗夜ノ砲撃其効ナシ、午後十時砲声止ム、其レ何ノ意タルヲ解セズト雖モ必ス怯懦漢ノ逃策ナラント語リシモノアリシガ果セル哉、翌日ニ至リテ之レヲ知ルニ至ル
此日午前四時ヨリ我野砲六門臼砲二門ハ熾ンニ敵ニ向テ発射シタリ／午後九時四十五分我前衛ハ乗山ヲ占領セリ／午後十一時ヨリ前進シテ乗山に向フ

（4）九連城の攻略

第一軍司令部は九連城を攻略することを決め、二五日午後四時各師団・支隊に攻撃命令を出した（三四四～五頁）。次いで、各師団はそれぞれ傘下部隊に行動命令を発する。筆者が二五日午後一一時二〇分受領したと記録しているのがその命令である。ただ誤記がある。『日清戦史』は次のように第五師団命令を記している。

歩兵第二十一聯隊（一大隊欠）騎兵大隊（割り注：第一中隊ノ半小隊及第二中隊ノ二小隊欠）砲兵第三大隊、衛生隊及臼砲六門ハ武田中佐之ヲ指揮シ四時半虎山ヲ出発シ梨子園（割り注：楡樹溝ナラン）ニ到ルヘシ（三四七頁）。

筆者の所属する部隊名を間違い、騎兵大隊の存在を忘れている。ここからも、この「日誌」が従軍中に書かれたことを証明していると言える。

九連城攻略作戦の一〇月二六日（金曜）は「寒冷甚敷」かった。各部隊は夜明け前に露営地を出発し、九連城に向かった。筆者の砲兵大隊も夜食を終え、午前三時より前に出発して、虎山西北方三キロの楡樹溝（命令では「梨子園」と述べている場所）に午前三時に到着している。距離は短いが、靉河の支流と本流二つを渡らねばならず、夜間作業となり、一入苦労だった。『日清戦史』の記録している第五師団命令が事実だとすると、四時半の出発はまず騎兵大隊で、次いで歩兵の二箇大隊となり、最後に砲兵大隊や衛生隊だから、その出発は午前六時前後となり、夜明けに近くなる。そのほうが合理的だと思われるが、筆者の「四時三十分迄ニ至ル可シ」との師団命令に基づき早々と出発して「午前三時」には目的地梨子園に着いた、というのを一応信じておく。行軍を続け、昼食をとっていた時、「敵ハ鳳凰城へ退却セシ者ノ如シ」との情報が届いた。第五師団の歩兵第一一聯隊が前衛となって、午前六時前に九連城北方の連系堡から五、六〇〇メートルの地点に進出したところ、人気がせず、午前七時一五分北方連系堡を占領した（三四八頁）。その後、清国軍は安東県・鳳凰城方面に退却したと知る（三四九頁）。午前九時には、第一軍司令部・第五師団司令部も九連城に進出する。筆者の所属する武田支隊は、筆者の記録するとおり、九連城へ戻ることになり、午後三時九連城西方の堡塁に入った。『日清戦史』では、武田支隊は「七時出発」「十一時頃」に九連城

西方約四キロの転山子付近に到着したとなっている（三五〇頁）。このあっけない九連城陥落は、「虎山附近ノ敗戦ニ忽チ全軍ノ志気ヲ沮喪シ此堅固ナル陣地竝ニ夥多ノ火砲、小銃及弾薬ヲ棄テ、退却スルニ至レリ」（三五六頁）と『日清戦史』は推測しているが、より清国領に引き込んで、冬の難戦に持ち込む作戦だったとも考えられる。第三師団がこの後進出占領する海城をめぐる冬期攻防戦の激しさを考えると、その推測もあながち外れてはいないだろう。

九連城を無血占領した第一軍司令部は、歩兵第一一聯隊第二大隊を、安東県を経て靉河右岸の河口にある大東溝に進出させ、その付近海上に進んでいるはずの海軍に、「鴨緑江ノ戦勝」を知らせよ、と命じた（三四九頁）。これは一〇月二四日に旅順半島の花園口に上陸した第二軍との連絡も、海軍を通じて行える方法だった（三五〇頁）。

いずれにしろ「鴨緑江畔ノ戦闘」は終わった。『日清戦史』は、清国軍の戦死者約五二〇名（日本軍が収拾した者）、日本軍の死傷者一四九名、費消した砲弾四九三発、銃弾九万九九五〇発、戦利品の砲七八門、小銃約四四〇〇挺、俘虜一五名の下士卒、と記録している（三五六～七頁）。これらの報告に対し、一一月一一日「朕深ク之ヲ嘉尚ス、時方ニ冱寒ニ向フ、汝等夫レ各〻自愛シテ将来ノ成功ヲ期セヨ」という勅語が発せられた（三五七頁）。

十月廿六日　晴天

此日寒冷甚敷殊ニ昨夜来前進シテ彼有名ナル鴨緑江ノ岸辺ニ在リ、時余一層ノ寒気ヲ感セリ、昨夜十一時二十分命令ヲ得タリ、其要領左ノ如シ

軍ハ明日九連城ニ前進シ梨子園ヨリ愛河ニ沿ヒ青溝子嶺ヨリ通之溝ヲコエテ九連城ニ前進、前衛ハ明日午前六時迄ニ九連城ニ対スル高地ヲ占領スル筈

本隊ノ内歩兵第二十一聯隊砲兵第二大隊衛生隊臼砲六門ハ武田中佐之レヲ指揮シ虎山ヲ発シ梨子園ヘ午前四時三十分迄ニ至ル可シ

右ノ命令ニ対シ食事ヲ調ヘ午前三時梨子園ニ至ル時シモ寒気甚シキカ為メ我指揮官ハ前衛ヲシテ焚火ヲ許可シタルヨリ所々ニ火ヲ点シ併モ大軍ノ兵士来ルノ状ノ如クニシテ各所数百ヶ所ニ点火シタリ

虎山ヨリ梨子園近傍ハ敵ノ死体数百アリテ我砲兵ハ歩兵第二十一聯隊ノ掩護ヲ受ケ前進ス、九連城ハ既ニ敵ヲ追撃シタル后ナレハ第三師団之レヲ追撃シ我師団ハ靉河ヲ左岸九連城ニ対スル高地ニ集合シ一時休憩トテ亦前進ヲ始メタリ、此地ニ来ル靉河ハ二ケノ支流アリテ其巾約五十間深サ大腿ニ及ブ。此河中ニ敵ノ死体数百アリテ我人馬其上ヲ歩スルニ至ル

此時ノ寒冷ハ甚シク身ニ迫ルモ敵兵追撃ノ際ナレハ躊躇セズ河中ニ飛入リ渡リタル其勇気ハ幾十万ノ敵モ抗シ難カル可シ

此高地ヨリ九連城ノ背面ニ至ル山路ヲ前進中敵幕営シタル跡数ヶ所アリシ、直行二里余ニシテ休憩ヲ成セリ、時ニ午前十一時

午前十一時五十分亦前進ヲ起シ約半里ヲ進ミ路傍ニテ午食ヲ喫シ終リシガ敵ハ鳳凰城ヘ退却セシ者ノ如シ、第三師団ハ之ヲ追撃ス、依而我本隊ハ九連城ヘ帰ル可シトノ命アリ、午后三時九連城ニ帰リ其西端ノ堡塁中ニ入ル

此日溲河ノ支流二ヶ所ヲ渡リシニ深サ大腿ニ及ブ、然ルニ前営ノ第三師団前進ノ際ハ水浅ク短靴中ニ達スト云、其奇ナル原因不明。

二　新たなる作戦―山縣有朋第一軍司令官の野望―

（1）大本営訓令の再解釈

一〇月二七日は土曜日でもあり、「兵力休養」が命ぜられた。一〇月八日大本営が第一軍司令部に与えた訓令は、「第一軍ノ任務ハ其前面ノ敵ヲ牽制シ間接ニ第二軍ノ作戦ヲ援助スルニ在リ」（第二巻二三四頁）だった。第二軍（軍司令官：大山巌陸軍大将。第一・第二師団・混成第一二旅団）は、「聯合艦隊ト協力シテ旅順半島ヲ占領スヘキ任務」（同）を持っており、それを援助するのが第一軍の与えられた役割だった。「鴨緑江畔ノ戦闘」が予想以上に早く終わった第一軍司令部、特に山縣有朋軍司令官は、この訓令の先を進もうとしていた。筆者たち傘下の各部隊は、しばしの休養を楽しむことになった。

十月廿七日　晴天

本日ハ滞在、兵力休養

一〇月二八日（日曜）も休養だったと思われる。それにしても寒さが強まってきた。「身ヲ裂ク」冷風が感じられる。官給品のみを身につける下士卒は、まだ夏袴しか与えられておらず、寒さを訴える兵士も多くいたようだ。

十月廿八日　晴天

此日風アリテ冷風身ヲ裂クノ有様寒冷一層ヲ感ス、夏袴ヲ穿チタル故各兵寒ニ冒サル、者多シ

山縣ら第一軍司令部は、一〇月八日の大本営訓令（第二軍の旅順半島制圧を援助すること）を「再解釈した」、と私は以前書いたが（『日清戦争』一六八頁、吉川弘文館、二〇〇七年）、『日清戦史』は、「第十四章　鳳凰城、大孤山地方ノ占領」の冒頭で、次のように書いている。

是ニ於テ大将ハ更ニ此ノ新任務ヲ完ウセンカ為メ且ツ虎山附近ヨリ敗走セル敵ヲ追撃シ之ヲシテ再ヒ韓国ニ侵入スルコト無カラシメンカ為メ鳳凰城ニ前進シ之ヲ攻略スルニ決セリ（三五八頁）

軍人の発想はこんなものかと思う継続作戦への欲求である。一つの作戦が成功すると、さらに次の作戦を求める前線の司令部。それぞれにそれなりの理由がつけられる。

大本営は、秋口までに旅順半島の攻略・占領をなせば、北洋海軍の根拠地の一つ旅順港と港湾施設をおさえることになるので、そのあたりで講和交渉開始を当初考えていたのではないだろうか。もう一つの北洋海軍根拠地・威海衛の攻略・占領作戦は伊藤博文首相の発案であり、鳳凰城攻略作戦は山縣第一軍司令官の作戦だった。鳳凰城を占領すると、次は海城、さらに営口、牛荘へと清国東北地方南部に冬期の戦場が広げられていく。

（2）鳳凰城攻略作戦

二日間の休養は終わった。一〇月二九日（月曜）の午後、鳳凰城攻略作戦が命じられる。九連城から鳳凰城は五〇キロの距離、西北方に

あたる。ただ筆者の部隊、野砲第五聯隊第三大隊は九連城守備部隊に止められた。どの拠点に配備されようと、雪深い冬期作戦になり、苦しめられることになる。

戦利品目録がこの日の日記の最後に書きとどめられている。先に戦闘終了後の状況として『日清戦史』が報じているものと比較すると、

『従軍日誌』		『日清戦史』
大砲	83　内　32　八糎野砲	78　内訳なし
	50　清国製山砲	
小銃	記載なし	約4400
弾薬及糧秣	記載なし	多量
天幕	約540	
軍旗	3	

となり、大砲の数が異なるのがよく分からないが、当初の調査では『従軍日誌』にあるように八三と発表されたが、精査した結果七八と減らされたのかも知れない。『従軍日誌』が「八珊野砲」を「支那製ノ山砲」と区別しているのは、ドイツ製の野砲の意味だろう。虎山や九連城の堡塁一箇に付き二、三門から四、五門を配備しての交戦が計画されていたと筆者は判断している。清国軍は多量のドイツ製武器を、野砲から小銃に至るまで配備しており、そのことは今後の戦闘の困難さを語ってもいた。

十月二十九日　雨　午后雨止ム　風起ル

午后命令ノ要旨左ノ如シ

九連城ニ拠リシ敵ノ大部分ハ鳳凰城ニ退却シ湯山城ハ既ニ我騎兵ニ依リテ占領セラレタリ／軍ハ明日鳳凰城ニ向ヒ前進セントス

大迫混成旅団ハ安東県ヨリ湯山城ヲ経テ楚基嶺ニ出ツ／各地守備隊ハ各員陣地ヲ警戒シ且ツ第三師団ヨリ小口鎖安東県及湯山城ニ派遣シタリ、守備隊ニ連絡ス

我砲兵第三大隊ハ九連城守備隊ノ内ヘ編入セラル／此日九連城内堡塁ノ一部散歩セリ、此地ニ在シ砲塁数七十個ニシテ内砲車ヲ備セシ者約四十個ナリ、其堡塁ノ道ノ外面ハ平壌ニ在リシ者ト均シク天幕ニ換フルニ土造ヲ以テセル兵舎ヲ築キタリ、我軍火弾ヲシテ其効力ナカラシムルノ目的ナルカ如キモ亦冬営ヲナス目的ナリシガ如キニモ見ユ／此地分捕大砲ハ八十三門ニシテ内三十二門ハ八珊野砲、残余ノ五十門ハ支那製ノ山砲ナリ／右ハ各保（ママ）塁中ニ二三若クハ四五門ヲ備ヘ居タリトモ皆閉鎖器ヲ脱棄テタリ／天幕約五百四十　軍旗三　死傷者千五百人　我死傷者百三十四名ナリシト云フ

一〇月三〇日（火曜）鳳凰城攻略作戦のあっけない終了が伝わってきた。『日清戦史』によれば、立見旅団に属する騎兵第五大隊の二箇小隊（約五〇名）が前衛部隊として、二九日午前七時に湯山城（九連城から西北方三〇キロで、鳳凰城へは高麗門を経て二五キロ。鳳凰城攻略作戦の前線基地）を出発し、一〇時二〇分には高麗門に到着した。そこから遠望すると、午後一時には鳳凰城に火がついたのがわかり（『日誌』と着火の時間が異なる）、前進して城下での若干の戦闘後、

午後二時五〇分鳳凰城に突入、占領した。捕獲品は「山砲二門、臼砲三門及其他ノ戦利品」（三六六頁）で、臼砲の数が一門相違する。立見旅団は、三〇日午前四時過ぎ、九連城から一四キロの露営地（岭路子）を出発し、鳳凰城に向かった（三六七頁）。正午前湯山城に到着、宿営の後、三一日午前一一時二〇分鳳凰城に入城した（三六九頁）。鳳凰城防衛を強化するために、予備砲廠の野砲二門が追加配備される（三七〇頁）。歩兵第二一聯隊第二大隊が湯山城守備に派遣され、湯山城に残留していた歩兵第一二聯隊の一箇中隊は、鳳凰城の本隊に合流した（同）。

こうして立見旅団が鳳凰城、第五師団が九連城、第三師団が安東県に宿営して鳳凰城攻略作戦は終了した。ところが、既に第一軍司令部は、次の作戦を立て始めていた。『日清戦史』が率直に記しているところを引用する。

是ヨリ先キ軍司令官ハ鳳凰城容易ニ我ノ占領ニ帰シ軍ノ同地ニ前進スルコトヲ廃ムルヤ直ニ大孤山地方占領ノ計画ニ着手シタリ、蓋シ該地占領ノ目的ハ第二軍及海軍トノ連絡ヲ確実ニシ前面ノ敵ヲ牽制シテ間接ニ第二軍ノ作戦ヲ援助シ且ツ海運ノ道ヲ開カントスルニ在リ（三七四頁）

九連城と安東県は、いずれも靉河の右岸にあり、約七キロの近さだった。下流の安東県から河口の大東溝までは三五キロある。大東溝から海岸沿いの道を五五キロ西に進むと、大孤山の町にたどり着く。ここまで占領すれば、海軍や海上輸送との便は大いに捗る、というのが軍司令部の考えだった。大孤山から東北へ延びる街道を七五キロ進むと湯山城に着き、そこを湯山城の後方補給基地として使うこともできる。『日誌』はこの日の最後に、第三師団司令部が、大迫支隊を編成して、大孤山攻略に向かうことを命じたことを記している。これは『日清戦史』第二巻三七七頁にある師団命令の一部になる。一一月一日（木曜）午後には、大迫支隊が、清国軍は大孤山を撤退し、岫巌州方向（大孤山から西北へ六〇キロ）へ退却した、という住民情報を手に入れていた（三七八頁）。福島支隊（福島安正中佐、歩兵第一八聯隊の一箇大隊と騎兵七騎。食糧徴発を任務）がいち早く一一月五日午前一〇時大孤山に到着する。こうした情報は『日誌』にはまったく記されていない。

十月三十日　晴天

午前四時着前衛司令官ノ情報左ノ如シ

（午前：消し）今廿九日午后五時、敵ハ鳳凰城ニ火ヲ放チ退却セリ、小数ノ敵兵止マリテシ射撃セシヲ以テ捜索ニ出セル騎兵中隊ハ未タ鳳凰城ニ至ラズ、其附近ニ宿営セリ、騎兵ノ全部ハ今朝鳳凰城ニ入ル

仝午前七時十分着　仝官ヨリ発

鳳凰城ニハ敵ノ歩兵約三十名アリテ射撃セシモ直チニ之レヲ撃退シタリ、此際敵九名ヲ殺セリ／鳳凰城ハ昨日敵火ヲ放チ三百軒斗焚ケタリ、本日我兵ノ前進ヲ見テ更ニ火ヲ放テリ／山砲二門臼砲二門管打銃多数、天幕数十ヲ得タリ、敵ハ多ク奉天府方行（ママ）ヘ退却／世家堡子ヨリ鳳凰城ニ至ル道路ハ猛ニシテ嶮悪ナリ、捕虜ノ言ニ拠レハ軍隊ハ悉ク散乱多クハ海岸ニ向ヒ逃ケタリ、

之レ奉天府方行ニ逃クレハ再ヒ捕ヘラレテ兵卒トセラルレハナリ、只大将様ノミ奉天府方行ヘ向ヒタリ

此日司令官ヨリノ命令達左ノ如シ

第三師団ヨリ歩兵第二大隊騎兵一中隊及砲兵一中隊ヲ大迫少将ノ指揮ニ属シ大東溝ヲ経テ大孤山ニ派遣シ右大迫枝隊ニ属ス／大島旅団ハ別命アル迄前進ヲ見合ス

（3）冬営に向かう

筆者の部隊は九連城守備隊としてとどまっているためか、記述が極端に少なくなっている。一〇月三一日（水曜）から一一月三日（土曜）まで四日間晴天が続き、安東県では軍政が敷かれ、日本は民政庁を設置して、外務省書記官小村寿太郎を責任者とした。

十月三十一日　晴天　寒気日増

此日安東県ニ民政庁ヲ設置セラレ書記官小村寿太郎其長官タリ

一一月一日（木曜）の記述はなかった。

十一月一日　晴天

一一月二日（金曜）晴天で寒さも次第に厳しくなった頃であろう。兵站部から「襦袢」が届き、全員に配布された。冬用の下着である。

十一月二日　晴天

追送品ノ襦袢着ス、各人ニ分配

一一月三日（土曜）も晴天で、やはり兵站部から「冬袴」、冬用ズボンが届き、配布された。酒も二合配布されたが、やはり寒さしのぎだろう。

十一月三日　晴天

本朝冬袴着、直チニ各人ニ分配／此日酒二合ツヽ分配

一一月四日（日曜）は久し振りの雨で、兵站部から届いた「靴下二足靴一足」が配布された。上陸以来五ヶ月が過ぎ、靴も相当傷んでいただろう。

十一月四日　雨

此日靴下二足靴一足ヲ分配セラル

一一月五日（月曜）から七日（水曜）までは晴天の記述のみで、七日の項には「寒」と追加に記された。いよいよ寒さがつのる。

十一月五日　晴天

十一月六日　晴天

十一月七日　晴天　寒

一一月八日（木曜）晴天で、この日から鬚河が氷結した。寒さも極まってきた。ロシアの参謀長が戦地視察で各地を巡視する、という情報が軍司令部から伝わったのだろう。『日清戦史』第八巻「第四十八章　民政其他ノ施設」には、「七　通訳及従軍者」の項がある。

又外国武官及同新聞記者ニ従軍ヲ許可セシモノ有リ、外国武官〈二行割り：英国三名（内一名ハ将校相当官）、米国二名、露国一名、仏国一名〉ノ為ニハ二十七年九月六日大本営ニ於テ外国武官従軍心得ヲ制定シテ従軍出願ノ手続、人員ノ制限、軍機ノ秘密ヲ守ルヘキ義務等ヲ規定シ之ニ依リ取扱ヲ為シ、又其新聞記者〈二行割り：英国八名、米国五名、仏国四名〉ノ為ニハ同十四日陸軍

省ニ於テ概ネ内地新聞記者従軍心得ノ例ニ依リ取扱規程及従軍心得ヲ制定シタリ（一四一～二頁）

英国・米国・露国・仏国の四ヶ国が、軍人七名、新聞記者一七名を派遣し、世界に日清戦争を伝えている。ここから第二軍の旅順虐殺事件が世界へ知られることになった。七名の従軍武官は、数字だけの記録で、「魯国参謀長陸軍歩兵大佐」という具体像が示された最初だろう。大佐で参謀長ということは、ロシアの師団か旅団レベルの参謀長と思われる。

十一月八日　晴天

本朝ヨリ河水氷結シタリ／此日魯国参謀長陸軍歩兵大佐戦地視察ノ為メ各地ヲ巡視セラル

一一月九日（金曜）と一〇日（土曜）も晴天記録だけで、記述はない。

十一月九日　晴天

十一月十日　晴天

一一月一一日（日曜）も晴天で、引き続き冬営用の衣服が支給される。ようやく毛糸製の靴下・襦袢（シャツ）・袴下（紐付きのズボン下）が分配された。一〇月二四日から二六日にかけて花園口に上陸した第二軍の作戦が順調に進み、一一月六日には金州庁と大連湾を占領したという情報が入ってきた。

十一月十一日　晴天

此日毛糸製靴下襦袢袴下ヲ分配セラル／此日ノ情報左ノ如シ

第二軍ハ去ル六日僅カノ戦闘ヲ以テ金州庁及大連湾ヲ占領、敵ハ旅順方行（ママ）ニ退却セリ

一一月一二日（月曜）鴨緑江渡河以降の作戦に対し、天皇の「嘉尚」するという勅語がこの日伝達された。部隊を集め、聯隊長や大隊長が読み上げたのだろう。下賜品があった、という記録はない。

十一月十二日　晴天　冷気強シ

此日第一軍ヘ左ノ勅語ヲ賜ハリタタリ

明治廿七年十一月十一日

第一軍司令官陸軍大将伯爵山縣有朋

汝等忠勇ナル善ク百難ヲ排シテ進ミ敵ヲ朝鮮国境外ニ撃退シ遂ニ敵国ニ入リ要衝ノ地ヲ占領ス、朕深ク之ヲ嘉称（ママ）ス、時方サニ冱寒ニ向フ、汝等夫レ各自愛シテ将来ノ成功ヲ期セヨ

軍司令官ノ訓示左ノ如シ

大本営ノ訓示ニ基キ本日各師団ニ各位ノ位置及ヒ其準備ヲ命セリ、然ルニ事ハ何時前進ヲ成シ或ハ不意ニ敵襲ヲ受クルモ斗ラレザレハ警戒ヲ厳ニシ其運動準備ノ為メ戒心ヲ加フ可シ

一一月一三日（火曜）焼酎の分配はやはり寒さしのぎだろう。旅順半島を攻略している第二軍の情報として、金洲等にいた清国軍の敗兵は、北上して岫巌州方向に向かったと言う。そこで第一軍では、大孤山の大迫支隊に、岫巌州攻略に向かうことを命じた。一方鳳凰城の守備隊であった立見旅団には、より北方の遼陽への前進が求められ、北方九〇キロの連山関を一一月一二日占領したと報告が入った。寒さが厳しい中、野戦が続けられ、作戦は難航する。

十一月十三日　晴天

此日焼酎五勺ツヽ分配セラル
此日命令左ノ如シ
我第二軍ハ兵站主部ヲ大連湾トシ亦敵ノ一部秀厳（ママ）ニ遁在、大迫少将ハ連合枝隊ヲ率ヒ明後日大孤山ヲ出発シ彼ノ地ニ向テ前進／立見旅団ノ先頭隊ハ鳳凰城ヲ遼陽ニ向ヒ前進セシム、行々敵ノ馬隊ヲ追撃シ昨日連山関ヲ占領セリ

（4）義州での冬営と伝えられる戦闘情報

この間第一軍司令部は、冬営を進め、糧食が一貫して欠乏していることから、一部部隊を後退させ、分散することになった。第五師団が冬営命令を第一軍司令部から受領したのは一一月一二日（第二巻三九一頁）。主力部隊を、九連城から義州にかけて分散配置し、立見旅団だけを前線である鳳凰城に配置することになった。筆者の部隊は、もう一度鴨緑江を渡り、朝鮮の義州で冬営することになる。一一月一四日（水曜）義州へ向け九連城を出発した。

十一月十四日　晴天
此日義州ニ向テ冬営ノ為メ至ル

一一月一五日（木曜）義州南大門に到着し、舎営となった。行路では鴨緑江が氷結して人馬が歩行した。相当な厚さの氷結だった。

十一月十五日　晴天
義州南大門内ニ舎営／此日既ニ鴨緑江ハ一面ノ氷面トナリ人馬其上ヲ歩行シ得ルニ至ル

一一月一六日（金曜）晴天で、下士官に限り、酒二合が配布された。なぜだろう。

十一月十六日　晴天
此日下士ニ限リ酒二合ヲ分配セラル

一一月一七日（土曜）、雪に包まれた前線、鳳凰城が奉天からの清国軍によって攻撃された、という情報が伝えられる。「黒龍江将軍」と呼ばれているのは、『日清戦史』によれば「依克唐阿（イクタンア）」で、歩兵五千、騎兵一千、砲四門を率いていた（第二巻四〇一頁）。これにその他の部隊を併せ約一万の部隊が、鳳凰城東北六五キロの甕陽辺門付近に進出していた（同）。『日清戦史』では、一一月中旬から一二月初旬にかけて「鳳凰城守備隊ニ就テハ別ニ記載スヘキ動作ナシ」（四五八頁）とあるので、鳳凰城が襲われ、守備隊が撃退した、というのは場所間違いだろう。

もう一つの大迫支隊の報告である。一一月五日、大孤山に駐屯していた大迫支隊で把握されていた部隊は、歩兵第六聯隊を基幹とし、歩兵第一八聯隊の一箇大隊、騎兵第三大隊、野砲第三聯隊の一箇大隊だった（四七一頁）。五日から一一日にかけて、西北五五キロの岫巌城に清国軍約二〇〇〇人がいるという情報が集まってきた（四七二頁）。第三師団司令部は、「岫巌ノ敵ハ掃攘ノ見込ミ」だが、大迫支隊は「敵情ヲ捜索シ至急報告スヘシ」と一二日正午頃命じてきた。支隊は、一三日と一四日に強力偵察を騎兵大隊に命じ、出発させた。ところがその夜八時頃、師団司令部から、鳳凰城の歩兵一箇大隊を岫巌攻略に向かわせたので、支隊も急行せよ、との新しい命令が届く（四七四頁）。一六日先行していた騎兵大隊が、清国軍と接触したが、戦闘は

なく、村落露営となった（四七八頁）。同日大迫支隊の本隊が大孤山を出発、翌一七日午後、岫巌城の南四キロの土門子嶺付近に進出したが、清国軍は次第に岫巌城方向へ退却していき、この日も戦闘はなかった（四八二頁）。『日清戦史』は戦闘はなく対峙していた、と記し、『従軍日誌』は「敵ト開戦」と記録する。死傷者の数も明記しているから、この日戦闘はあったのだろう。夜一一時頃には、清国軍が岫巌城から引き上げていっている、という情報が前線部隊から届き、翌朝追撃を開始したが、及ばなかった。一八日午前八時二五分、騎兵中隊と歩兵中隊が、無人の岫巌城に進入する（四八五頁）。九時頃には支隊のほとんどが入城している（同）。退却した清国軍は、大部分が海城方向へ、一部が蓋平方向へ向かったと見えた。これがまた次の作戦の要因となる。

十一月十七日　晴天

此日敵ノ黒龍江将軍鳳凰城ヲ恢復センガ為メ攻撃シ来ル、我守備隊之レヲ撃退セリト

情報午后六時五分着　大迫少将発

麻鬼天嶺ノ敵ト開戦／敵ノ一部ハ退キ堡塁ニ在ル敵ハ退カズ、敵ハ二営ト砲二門ヲ有ス／此日我即死一名負傷三名

一八日（日曜）、筆者の部隊は、義州に駐屯している。朝なのか夜なのか、一一時から雪が降ってきた。

十一月十八日　晴天　十一時ヨリ降雪

一九日（月曜）晴天が続き、慰問品の手拭い一本と手紙一帖が配布される。冬営中、若干の訓練の合間に、故郷への手紙を書くことになる。

十一月十九日　晴天

此日寄贈ノ手拭一枚手紙一帖ヲ分配セラル

二〇日（火曜）も晴天。訓練の記録も外出の記録もなく、大連湾と岫巌城から届いた情報のみが記録されている。「古川大佐」は柳樹屯に駐屯していた兵站監で、弾薬や食糧、衣類などの前線発送を担当するだけでなく、各部隊への情報発信も担っていた。海軍の情報と第二軍による旅順口攻撃の情報を伝えてきた。大迫支隊からの報告も記録している。一八日午前九時岫巌城を占領した、というのは『日清戦史』と一致している。

岫巌城付近の戦闘（一七、一八日）で死傷者は下士卒四名とされ（『日清戦史』四九四頁）、『従軍日誌』一七日の条の記述と一致する。岫巌城の戦闘が終わった。費消弾薬は、榴弾四発と小銃弾一万七五七二発で（四九四頁）、砲兵はほとんど何もせず、歩兵の火線で終わった戦闘となった。一七日の記述も、二〇日の記述も正確である。これは、それぞれの情報が、舎営地の部隊本部に張り出されていたことを物語っているのではないか。あまり間違いのない情報は、部隊本部に張り出された情報を、筆者が細かくチェックし、記録していたことを証明していると思われる。

十一月廿日　晴天

此日情報左ノ如シ

十九日午后五時大連湾発　古川大佐ヨリ

敵ノ首艦隊及砲艦四ハ威海衛ニ在リ、之ヲ誘出スルコトヲ挑ミ

タルニ彼レ堅ク防禦線内ニ引籠リ出テ来ル模様ナシ、依テ巡洋艦二艘ヲ止メ其挙動ヲ伺ハシメ他ノ諸艦ハ本朝大連湾ニ帰レリ

／旅順口攻撃ハ来二十一日、敵ノ兵力一万二千ナリ

十一月十八日午前十時岫巌大迫少将ヨリノ報告

十一月十八日午前六時三十分開戦、午前九時岫巌ヲ占領セリ、敵ハ西北ニ向テ退却セリ、我兵死傷ナシ、砲五門ヲ奪ヘリ

二一日（水曜）も晴天で、筆者の戦闘情報記録は続く。「三原少佐」は、鳳凰城守備隊の司令官の歩兵少佐三原重雄で（第二巻四一一、四三八頁）、一一月後半は鳳凰城の防衛線として設定された、北方六〇キロ付近の賽馬集・草河嶺・連山関（東から。この間七〇キロ）をめぐる攻防が焦点だった。「歩兵第十二聯隊ノ一中隊」は、一五日昼に鳳凰城を出発して、賽馬集方面の捜索・警戒を命じられた部隊で、一九日午前騎兵・歩兵各数百という優勢な清国軍の進出により、苦戦を強いられた。「敵ノ騎兵ヲ撃攘スルニ勉メタリト雖モ敵ハ益々猛烈ニ突進シ来ルカ故ニ遂ニ支フル能ハス東方ノ山麓ニ沿ヒ退却ヲ始メタリ」（第二巻四一六～七頁）。部隊は勢いにおされて「部下ニ令シテ弾薬及携帯糧食ヲ除クノ外携帯品ヲ放棄シテ軽装セシメ疾駆山嶺ヲ下リ辛ウシテ本道ニ出テ退却」（四一八頁）となった。この退却の中で中隊は分散し、一五八名の部隊で出発したものの、一九日夕方に中隊長が把握していたのは「僅ニ六十七名ニ過キサリキ」（四一九頁）だった。翌二〇日、二一名を収容して、二一日に鳳凰城に戻ることができた（同）。これが三原少佐の報告として記録されたものの基礎事実である。

十一月二十一日　晴天

此日ノ状報左ノ如シ

十一月二十一日三原少佐ヨリノ報告

昨日暁（一字消し）賽馬集ニ対シ大清江ニ派遣セラレタル歩兵第十二聯隊ノ一中隊ハ敵ニ襲ハレ自分ハ其中隊ノ一部ヲシテ直行シ鳳凰城ニ行進ノ途中第八中隊ト合ス、其他ハ小隊長率ヒテ雪裡站ヘ退却セリ、正午再ヒ敵ハ賽馬集ニ退却セリ

二二日（木曜）は遂に雪が降り出し、北風も強く、凍傷にかかる程厳しい寒さだった、

十一月二十二日　雪

本日北風強ク室外ニ出ツレハ其烈風ノ為メニ凍傷ヲ発スルノ有様、其一斑ヲ察ス可シ

二三日（金曜）は雪が降り止み、曇となったが、冷たい空気の中で六センチ（二寸）の積雪となった。筆者の部隊は、冬期の戦闘からはずされ、義州で冬営することになり、戦闘の世界から遙かに遠ざかった。戦力として不要なのではなく、ひたすら食糧確保の少なさからだった。一一月中旬（『日清戦史』には日付の記載がない）には第一軍司令部も九連城から、より海岸に近い安東県に移った。そこで軍司令部が努力を集中したのは、食糧と冬支度だった。『日清戦史』は、率直に次のように語っている。

軍ハ近海結氷前糧秣及防寒具ノ揚陸及前送ヲ充分ナラシムルニ孜々タリ

言ってみれば、開戦五ヶ月目の段階になっても、食糧も冬装備も全く

足りなかった、ということだ。そういう状況下で、第一軍司令部は、山海関付近に上陸し、天津から北京を総攻撃する案を一一月三日に大本営に提案していた（第二巻三八七頁）。こうした非合理な作戦を見ると、第一軍司令官山縣有朋の強引な、かつ功名心に駆られた精神状況が見えるように思う。

十一月廿三日　曇天

昨日来小降雪二寸

二四日（土曜）、二五日（日曜）と晴天だったが、二四日の夜には雪が降った。二五日に義州の駐屯地に届いた第二軍の旅順口攻略作戦の報告は、ほぼ一日で占領し、作戦が終わったとしている。予想外に短い作戦となったが、この報告でも、「敵ハ終末ニ至ル迄頗ル頑固抵抗ヲ成」した、とあり、これから以後の冬営が穏やかには過ごせないだろう、という暗い予感を感じさせるものだった。なお「第二軍伊藤司令官」は「大山巌司令官」の誤り。

十一月廿四日　晴天

十一月廿五日　晴天

昨夜降雪シタリ

此日情報左ノ如シ、出第二軍伊藤（ママ）司令官ヨリ

第二軍ハ廿一日暁（ママ）払ヨリ旅順口方陸上面ノ諸堡塁ヲ攻撃セリ、即チ第一師団ハ右翼隊、混成第十二旅団ハ左翼ニ展開シ攻撃砲其中間ニ位置セリ、敵ハ終末ニ至ル迄頗ル頑固抵抗ヲ成セレモ（ママ）遂ニ第一師団ハ午前八時三十分騎砲兵錬兵場ノ西方ニ在ル堡塁ヲ占領シテ午后二時旅順口ニ進ミ午后四時黄金山ノ砲台ヲ占領セリ、混成長谷川旅団午前十一時三十分八目庄東南ノ堡塁ヲ占領セリ、廿二日午前ニ於テ軍ハ全ク自余海岸諸砲塁ヲ占領セリ、我死傷将校以下二百余名、敵ノ死傷及捕虜ハ不明ナレトモ死体二十余アリ、戦利品特ニ大量ノ大砲弾薬甚タ多シ、敵ノ兵力二万ヲ降サルガ如シ

二六日（月曜）は晴天だったが、二七日（火曜）は晴のち雨となった。雨も地上ではすぐに氷結するという寒気の激しい日となった。

十一月廿六日　晴天

十一月廿七日　晴

此日降雨アリ。地ニ落ツレハ直チニ氷結シテ氷トナル、特ニ北風烈シカリシ

二八日（水曜）から三〇日（金曜）まで三日間晴天が続いた。秋晴れと言うべきかも知れないが、高気圧による寒気の厳しい冬が予想された。各部隊は兵を出し、薪炭の徴発のため出かけた。この日の段階の第一軍配置図は第2図を参照。

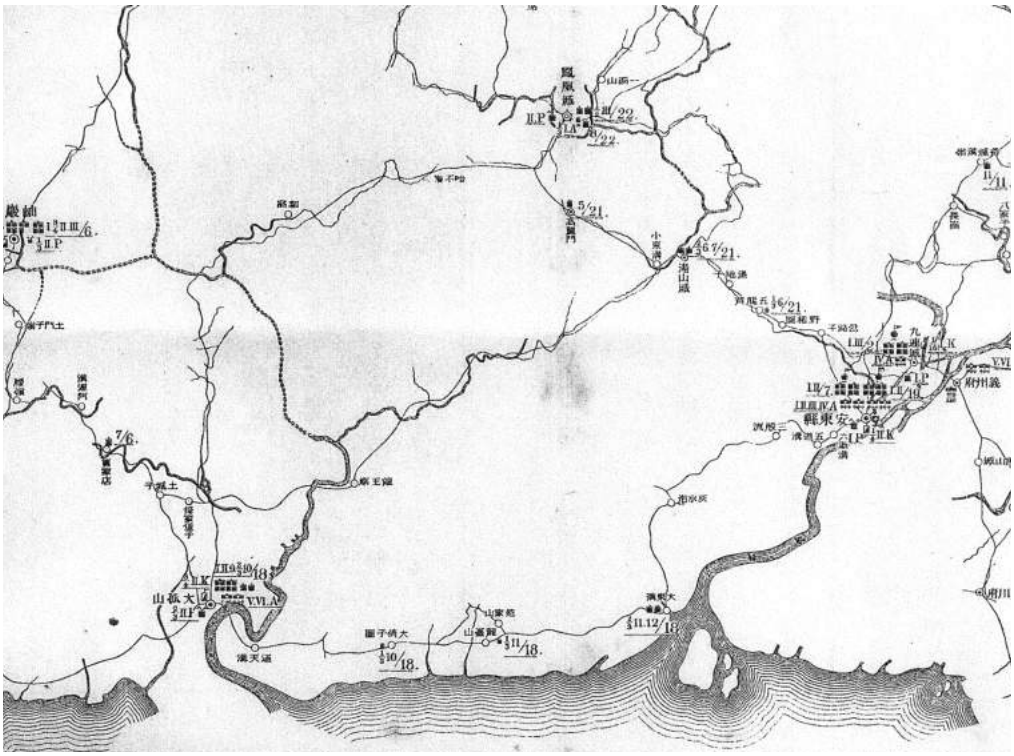
十一月廿八日　晴天

十一月廿九日　晴天

一昨日来各営ニ於テ薪炭徴発ノ為メ白馬山城へ向フ、出張各兵日々之レヲ運搬ス

十一月卅日　晴天

いよいよ一二月になる。一日（土曜）、海岸から陸揚げされた防寒外套などが安東県まで届いたので、義州から受領隊を出して受け取った。筆者の部隊でも三〇枚を受領し分配した。大隊、中隊、小隊のど



第２図　第一軍諸部隊位置図（『日清戦史』第二巻挿図第一）

のレベルに三〇枚か不明だが、おそらく一部にしか渡っていないように思う。またこの日、皇后から嘉尚の御沙汰が、山縣第一軍司令官から通知された。

十二月一日　晴天

此日安東県迄寒防外套到着、内三十枚受領、帰営之レヲ分配セラル

此日　皇后陛下ヨリ左ノ御沙汰アラセラレタリ

廿七年十一月廿八日

山縣有朋

我第一軍ハ毎戦功ヲ奏シ遂ニ敵国ヘ侵入シ要地数ヶ所ヲ占領セシ趣　皇后陛下聞召サレ深ク御感賞アラセラレ、殊ニ寒気ニ向ヒ艱難ノ程御察シ遊ハサレ尚将校下士卒各自愛シ前途ノ成功ノ程希望ノ旨御沙汰アラセラレタリ

二日（日曜）は北風が強いものの晴れていたが、翌三日（月曜）は雪となった。一〇センチ程（三寸余）の降雪で、一面銀景色である。四日（火曜）もいっそう寒い晴天だった。

十二月二日　晴天　北風強

十二月三日　雪

降雪三寸余四囲白銀ノ如シ

十二月四日　晴天　寒冷一層ヲ感ス

五日（水曜）は、城外に出て砲撃訓練が行われたようで、戦利品の野砲を試射している。おそらくドイツ製のクルップ野砲を使ってみたのだろう。砲弾も確保してあるので、春になっての作戦に利用価値が

高まった。

（5）第三師団の海城攻略作戦情報

この時期第一軍では冬営が実施されていたのだが、一二月一日第一軍司令部は、海城攻撃作戦の実施を大本営に打電した（第四巻四頁）。第一軍の左翼にあたる「潘家堡子、析木城及海城附近ノ敵兵」がしだいに増加しているようであり、「速ニ之ヲ撃退シ予メ大作戦ノ計画ニ応シ得ルノ準備ヲ為スハ目下ノ急務ナリ」（前述の電報の文章）との理由付けで、「第三師団ヲ岫巖及大孤山附近ニ移シ之カ実行ニ任セシム」（五頁）と第三師団が海城攻略作戦に動員されることになった。安東県に駐屯していた第三師団は、一二月三日から移動を開始し、岫巖城で大迫支隊と合流、一二日頃に析木城付近に到着の見込みと、四日第一軍司令部から大本営へ打電される。五日にこの電報を受け取った大本営は、困惑した。作戦の実施は命じておらず、冬営で温存した部隊を一挙に大作戦に投入する計画だったから、中止を求めたかったのが真意だろう。しかし、『日清戦史』は、この作戦にかまけて大作戦に穴を開けるようなことはしないだろうし、「海城ノ敵ニ一打撃ヲ加フタル上ハ直ニ兵ヲ退ケテ訓令ノ位置ニ就カシムルナラント思惟シ復タ之ヲ制止セサリキ」（第四巻七頁）と大本営が判断したと記している。つまり何の追加訓令も出さず、山縣の好きなようにさせたわけである。大本営は、山縣の政治力や権威に屈服し、自分に都合のよいように解釈して、冬期の攻城戦という困難な作戦を黙認した、というのが『日清戦史』の記述から合理的に解釈できる。

この『従軍日誌』が伝えている「師団長ヨリノ達」は、『日清戦史』に記載はないが、面白い内容を含んでいる。内容から見て第五師団長の通達と判断でき、その後半には、一二月一四、五日頃に九連城などを出発し、遼陽を攻撃する計画が記されている。第一軍全体に満洲地域の攻撃作戦が、大本営の思惑を越えて広がっていたのである。

十二月五日　晴天

此日鴨緑江上流ニ於テ分捕野砲射撃ヲ行ハル

此日師団長ヨリノ達左ノ如シ

第三師団ハ大治山（ママ）ヲ出発セリ、来ル十四五日ノ両日頃海城ニ着スル見込ミナリ

時機ニ依レハ我師団ハ后方ニ適ス可キ兵力ヲ遣シ他ハ遼陽ヲ衝クニ至ラン、其出発ハ十四五日頃ナル可シ

六日（木曜）から一〇日（月曜）まで五日間も晴天が続いた。しだいに物資の補給がつくようになり、六日には一人一枚の毛布が配布され、九日（日曜）には天皇からの恩賜として煙草が分配された。寒さが厳しくなった、と『従軍日誌』に書かれるようになってだいぶたつ一二月初旬に漸く配布された毛布一枚であり、恩賜の煙草も分量が多くなかったのだろう、平壌戦に参加した者だけ、という条件付きで配られている。

十二月六日　晴天

此日毛布一人ニ一枚ヲ分配セラル

十二月七日　晴天

十二月八日　晴天

十二月九日　晴天
此日恩賜煙草到着、平壌ノ戦ヒニ従事セシ者ニ限リ各一包ツヽヲ分配
十二月十日　晴天

一一日（火曜）さらに防寒衣料が増え、毛糸の靴下二足と紙製の胴衣、下袴（ズボン下）が分配された。船を使った運搬が充実してきたのだろう。立見旅団からの電報は、「廿日」とあるが、一〇日の誤りだろう。立見旅団は、摩天嶺付近の清国軍を牽制し、第三師団の海城攻撃作戦を援助することになった（第二巻四九八頁）。立見少将が率いる牽制支隊は、歩兵第二二聯隊を基幹とし、騎兵一箇中隊、野砲一箇中隊、工兵一箇中隊、衛生隊半部、糧食縦列（中隊）を加えた部隊で、鳳凰城守備隊とほぼ同じ規模だった（四九八～九頁）。牽制支隊は一二月九日鳳凰城北方二〇キロの雪裡站に到着。一二日に第三師団が析木城攻撃予定、との第三師団司令部からの電報が九日夜に立見少将のもとに届き、攻撃を急がねばならなかった。一〇日午前、支隊は歩兵数千の有力部隊と、張家堡子から焚家台附近で戦闘になり、午後一時四〇分には歩兵の突撃で敗走させることができた。戦闘途中では、清国軍が焚家台の東西高地で放つ速射砲二門ないし三門が射程距離も長く、無煙火薬のため正確な所在が不明で、支隊の野砲では対応できず、苦戦に陥っていた（五〇四～五頁）。歩兵少佐安満伸愛第二大隊長が負傷したのは、この時の作戦だった。安満少佐の負傷もこの日の電報内容として記されているので、やはり「廿日午后発」は一〇日の誤りと判断して間違いない。『日清戦史』は、この日の戦闘で、戦死下士卒一一名、負傷は将校以下四八名、費消弾薬小銃弾約三万発、砲弾五三発と記録している（第二巻五一〇～一頁）。捕虜や清国軍の損害については記されていない。『従軍日誌』の「死体百余名捕虜十数名」が貴重な記録である。

なお『従軍日誌』の最後にあるように、立見牽制支隊は、一一日午後草河口に到着し、村落露営して、駐屯を続けた（五一二～四頁）。

十二月十一日　晴天
毛糸ノ靴下二足紙製ノ胴衣及ヒ下袴ヲ分配ス
此日立見少将ヨリノ電報　廿日午后発
今廿日午前九時前衛金家河ニ至ル時敵ノ騎兵其北方ノ狭隘ヲ占領スルヲ見之レヲ撃退シテ直チニシテ繁（ママ）家台ト二道堡ノ間ニ於テ本道ヨリ左右ノ山ニ依リ固守ス、依テ本隊ノ全力ヲ以テ攻撃シ午后一時半突貫ヲ以テ陣地ヲ占領セシム、敵ハ退テ再ヒ二道家ノ岡ニ拠リ防禦ス、再ヒ之レヲ攻撃シ突貫ヲ行ヒ午后四時終ニ通遠堡ヲ占領セリ
今日ノ戦ニテ敵ノ捨テタル死体百余名捕虜十数名其他分捕品多シ
捕虜ノ言ニ拠レハ敵ハ歩騎兵合シテ三四千砲二門皆黒竜江ノ軍ニシテ依将軍率ヒル軍ナリ／而テ馬（ママ）天嶺ヨリ来リタルモノハ在ラザルカ如シ、依将軍ハ鳳凰城ニ向フ為メ来ルト／我死傷約三十名安満少佐負傷、明日旅団草河口ニ前進ス

一二日（水曜）も一三日（木曜）も晴天で、寒さは激しく、結氷も続いた。一三日には前進命令が出て準備に入ったが、後続の記事が見あ

たらない。もう少し先で部隊の行動が判明するだろう。一三日に届いた二つの報告を解明しておこう。「友安大佐」は、鳳凰城の守備隊長友安治延歩兵大佐で、一二日の鳳凰城防衛戦を報告したものである。この「報告」は、『日清戦史』第二巻五二一～二頁にほぼ同文で掲載されている。友安大佐が一二日午後八時五五分に第五師団司令部宛に発したものである。鳳凰城東北方向の靉陽辺門か賽馬集方面から南下してきた歩兵数千、騎兵数百が、数方向から鳳凰城に攻撃を仕掛けてきた。『日清戦史』でも歩兵・騎兵は記されているが、砲兵の記事はない（一三日の清国軍の攻勢の際、砲二門が確認される。第二巻五二六頁）。

友安隊長は、戦闘の状況を、草河口に駐屯している立見旅団長に「電報シ来リシ」（第二巻五二〇頁）とあるので、第五師団司令部のある九連城はもちろん、前線の草河口とも電線を敷き通信していたことが分かる。『日清戦史』には次のようにある。

又野戦電信ハ十一月二十四日已ニ安東県ヨリ大孤山ニ至ルマテ竣工シ在リシカ軍司令官ハ海城攻撃ニ決スルヤ兵站電信隊ヲシテ更ニ溝連河まて延線セシメタリ〈二行割り：此工事ハ十二月九日畢レリ〉而シテ第三野戦電信隊ノ第三師団長ノ指揮下ニ属セラルヽヤ九日マテニ岫巌、溝連河間ノ電線ヲ架設セリ〈二行割り：電信隊ハ四日安東県ヲ発シ八日溝連河ニ到著シテ直ニ工事ニ著手シ九日竣工セリ〉然レトモ事故アリテ十一日ニ至リ始メテ通信ヲ開クヲ得タリ（第四巻一七～八頁）

これは第三師団の海城攻略作戦についての記事なので、安東県―大孤山―溝連河―岫巌間の電信線開通を記している。第五師団については、やはり『日清戦史』第二巻「附録第三十五　義州、鳳凰城、大孤山地方電線架設」の記事が、第六野戦電信隊が一〇月二九日に義州―九連城間に架空線増設、第三野戦電信隊が一〇月三一日夜鳳凰城―九連城間の電線架設、一一月五日九連城―安東県間の電線架設、第一野戦電信隊が一一月一五日九連城―安東県間の電信架設、第三電信隊が一一月一七日九連城―大東溝間、二四日さらに大孤山まで延長し、次いで大孤山から金州・大連湾の電信と結び、朝鮮から鴨緑江右岸、金洲半島までの広い地域が日本軍の電信線でつながることになった。電信線でいち早く情報が伝わるということが冬期の攻防戦を支える背景となり、なんとか乗り切る。

「倉辻少佐」は安東県民政庁出張員倉辻明俊工兵少佐で（第二巻五二一頁）、安東県のことではなく、鳳凰城の状況報告だと思われるが、『日清戦史』に該当する記事はない。

十二月十二日　晴天

十二月十三日　晴天

此日出発準備ノ命アリ、寒風強ク且ツ氷結甚タシ

此日友安大佐ヨリノ報告左ノ如シ

敵ハ一面山附近ニ停止ス、其兵力約二千ニシテ未タ砲兵ヲ見ズ、目下ノ況状（ママ）ニテハ賽馬集街道ヨリ前進セントスル者ノ如シ、明日依然タレハ此敵ヲ攻撃セントス

亦倉辻少佐ヨリノ報告左ノ如シ

払暁ヨリ聯隊長ハ敵ト開戦シ銃声ヲ聞クト。伝騎帰リテ曰ク

今朝ノ砲声ハ敵ノ発スルモノナリ、我砲兵ハ未タ発射セズ、敵ハ砲二門ヲ有ス、敵ハ退却ノ色アリ

一四日（金曜）は晴天だが、「〇・一一」の数字が記されている。おそらく零下一一度という意味だろう。霧もみちて、まるで雪が降っているかのように寒かったのではないか。友安少佐が一三日に伝えていたように、一三日は積極的に城外に出て攻撃に移った。戦闘は午前一一時前には終わり、防衛戦は成功した。この日の戦闘で、死傷者将校以下七四名、費消弾薬は小銃弾五万四五〇〇発、砲弾二四五発だった（第二巻五四六頁）。

兵站の補充が進んできた、と書いたが、この日は各自が足袋を作ることになった。支給されるものでは追いつかず、自ら手縫いすることになったのだろう。

十二月十四日　晴天　〇・一一

本朝ハ入霧アリテ降雪ノ如シ

友安少佐発　　十三日午后〇時三十分発

今朝六時三十分ヨリ開戦、今ヤ進撃中

此日各兵各自足袋ヲ調製ス

一五日（土曜）も晴天で、零下一〇度だった。氷は当然張っていただろう。

草河口の立見率制支隊が前夜打った電報が、おそらく部隊の掲示板に張り出されたのだろう。この内容は、友安守備隊長の戦闘報告に基づき作成され、責任者としての第五師団長宛報告となった。

もう一つの桂太郎第三師団長の電報は、海城攻略作戦に関連したもので、電文中の「明日此敵ヲ攻撃セントス」は翌一二日の析木城攻撃作戦を指している。一一日の析木城東南街道を北上する前哨戦は、雪道で移動困難があり、約三千の清国軍に対し午後三時頃まで苦戦を続けた。前衛部隊と行動を共にしていた師団参謀榊原忠誠歩兵少佐が負傷して、その後死亡し、前衛部隊の歩兵第七聯隊の下士卒七名が負傷した（第四巻四一頁）。

十二月十五日　晴天　〇・一〇

立見少将ヨリ　　十四日午后七時五分発

高家嶺ノ敵ハ依然ナリ、但シ昨日迄旗一本ヲ顕ハセシモ今朝ハ見ス

立見少将ヨリ師団長宛ノ報告　　十四日午后九時四十分発

午前十時三十分戦ヒ決ヲ結ヒ長岑子附近宛進撃シ午后三時三十分前衛北椅子ニ達シ停止ス、捕虜ノ言ニ拠レハ敵ハ依将軍ノ部下ニシテ約四千ナリト、其半バナル者ハ賽馬集街道ニ退却セリ、我負傷将校三人下士以下死傷者七十四名、捕虜四、分捕大砲四門、敵ノ死体其他ハ取調中

十一日午后十時　　桂中将ヨリノ電報　　蟒勾発

師団ノ前営ハ今日（十一日）ニ道河口附近ニ於テ敵ト突衝シ小戦闘ヲ成セリ、敵ハ嘆大全西方高地ヲ守備ス、其他櫻溝附近ニモ敵ノ砲兵現ハル、師団ハ今夜蟒勾ヘ警急舎営ヲ成ス、明日此敵ヲ攻撃セントス

此日戦闘ニ於テ敵ハ歩兵三千騎兵四百砲六門ヲ現ハセリ、我負傷四名死者ナシ、榊原参謀官負傷、敵ノ死傷不詳

一　大迫支隊ノ状景不明ナリ　一

むすびにかえて

今回の『日誌』の後半は、義州に冬営していた間に見聞きした軍事情報の解明になってしまった。次回は、一二月一二日の析木城攻撃作戦と占領、一三日の海城攻略作戦と占領、その後の防衛などが話題になりそうだ。『従軍日誌』は、一八九五年二月一四日まで書かれており、あと約二ヶ月の記載を解読・解明することが本稿の課題である。

（はらだ　けいいち　歴史学科）

二〇一三年十一月七日受理